「めりけんアレルギー」

鴫原真一

日本人のアメリカ・コンプレックスは太平洋戦争に敗れたからではない。幕末、ペリーが黒船の砲門を日本に向けたときからである。アメリカの威嚇に屈した幕府の開国政策に抗し、尊王攘夷を唱えて倒幕の兵を進めた雄藩が、イギリス公使の仲介で江戸無血開城に同意したのは、新政府がアメリカを牽制するのにイギリスを選んだことであり、日本人のアメリカ観を具現している。現に皇居を後見する形で半蔵門に静かに建つ英国大使館は、維新の政治地理を象徴する歴史的な証拠であろう。

ペリーの挑発に真珠湾攻撃で答えることになった日本の歴史も皮肉であるが、幕末・維新のアメリカ・コンプレックスが、今も反米思想に変身し、増幅されて再現するのも皮肉である。敗戦後、改めて日本人が戦勝国アメリカに感じたこのコンプレックスを「めりけんアレルギー」と名づけたのは野坂昭如である。出典は「アメリカひじき」(『別冊文芸春秋』101号・昭42・9)、昭和43年春、第58回直木賞を「火垂るの墓」と併せて受けた。

この短篇小説は、戦後二十二年目にアメリカ人の老夫婦を迎えることになったテレビCMプロデューサーの心理的なワダカマリを描いた作品であるが、その中に描かれた挿話が表題になっている。要点はこうである。八月十五日、B29が落した数えきれぬ落下傘は捕虜収容所への救援物資であったが、これをくすねて町内で分配した

ところ、両の掌山盛りほどの「黒いちぢれたこまかい糸屑のようなもの」がまじっていた。

「これなんやろか」落着いたところで、黒い糸屑、これだけは料理せんとあかんらしいが、匂いかいでも口になめてもようわからん、「俺きいてくる」なんせもう食いたい一心、とび出して近くの洗濯屋のおばはんにたずねると、ここでも首ひねっとる、「なんせ水にもどして、炊くのとちゃうやろうかねえ、ひじきによう似とるわ」そうか、そういうたら前にひじきに油揚げいうおかずあった、大阪商人の丁稚好物てきいたことある。すぐに俺は割れた七輪、針金で巻いたんに、火イ起して、焼残りの鍋をかけ、いわれた通り煮ると、どんどん水が赤茶にかわり、「ひじきいうんはこないなるのん？」母にきくと、不自由な脚ひきずってそばにきて「アクでたんやな、アメリカのひじきアクつよいんやわ」水をそっとほかし、あたらしくしても、なかなか赤茶はとれん、四度目にようよう澄んで来たから岩塩で味つけて、煮つまったところで味見したら、これはねちねち歯ごたえあるばっかりで、ものすごいまずい、まずいいうたらまず黒いうどんみたいな海宝麺やが、あれより味ないし、噛んでも口の中ひっつくみたいでのみこめん、「なんやこれおかしいで、煮すぎたんやろか」妹も母も食べてみて、変な顔しとる、「アメリカもまずいもん食うとってんなあ」母がつぶやき、しかし捨てることはとてもでけん、火イ通しとったらもつやろと、鍋ごとそれなりにして、チューインガムで口直しし、このアメリカひじきにはどこでも、どない料理してええんかわからずじまい。三日後兵隊からきいてきたいうて町会長が、「あれ、ブラックテーいうて、アメリカの紅茶の葉アでしたんやて」教えてくれた時には、もうどの壕舎にも、ひとっかけらも残ってなかった。

描き込まれているのは、悲しいまでの貧しさが生みだす無知である。象徴的な表現と考えたいが、碩学石田憲

次といえども、遊学するまではバターもチーズも口にしたことはなかったというから、日本人の欧米認識がどの程度であったかは知れよう。

戦時中にミシガン大学の日本語学校にいて、進駐軍として来日の経験もあるヒギンズが、片ことの日本語で拶挨すると、「絶対に英語をつかうまい」という決心も、「日本へ来たら日本語をつかえ」と、本土に敵を迎え撃つ昂ぶりもどこへやら、俊夫は「おどろきあわて、おかえしになにか英語でしゃべらねばならぬ」と浮足だって、あげくの果には上客のスポンサー接待に使うクラブへ招待、コールガールの世話までかって出る。

思えばなんでまた俺は、あの爺さんにこんなサービスせんならんねん、なんやヒギンズのそばにおると、一生懸命よろこばせたらなあかんみたいな気持になるのはどういうわけや、俺の親父殺した国の人間やのに、そんな恨みはまったくない、かえってなつかしいみたいな気さえする、十四歳の時の、あのでっかい体の占領軍に怯えた心を、今ヒギンズに酒おごり女抱かせて、帳消しにするつもりなんか、それとも、落下傘の特別配給にしろ、アメリカでは家畜の肥料いわれた大豆粕の配給にしろ、腹減ってしゃあない時に恵まれた恩がえしなんか、余剰農産物押しつけたいうけど、あの時アメリカがトウモロコシなと送ってくれなんだら、何万人飢死したか知れんで。にしてもヒギンズをなつかしい思うのはなんやろ、ヒギンズもひょっとしたら進駐軍で来た時のことなつかしがっとんちゃうか、あの悠然と人におごらしとる態度、なんやしらん図々しいそぶり、そらヒギンズにしてみたら、占領軍として日本へ来た頃が年からいうてもいちばん充実しとった人生で、そやからあるいはなつかしく、日本へ来たとたん占領軍の頃にもどるのはわからんでもないけど、こっちがそれにあわせて、当時の大人みたいにポンビキの真似までついしてしまうのはなんや、それがうれしいのはどういうわけ

や、別にアメ公と酒飲んで何の御利益あるわけやなし、俺もまたあの頃をなつかしがっとんのか、いやそんなはずはない、腹減って牛みたいに食べたもん反芻する癖がつき、二度も三度も口の中にもどして味わうようなみじめな時代、香櫨園泳ぎにいって、アメリカのボートに沖合いで追いかけられ、溺れそうなったり、中之島で女に逃げられたいうて、腹立てた兵士になぐられたり、どうみてもええ記憶はない。お袋かて、結局は戦災がもとで、とうとう体衰弱して死んだし、妹かかえてえらい目に合うて、考えようによってはアメリカのせいや、そやのに、ヒギンズの顔みるとサービスしたなるのは何故や、いやな男に犯された処女が、その男ついに忘れられんようなものか。

俊夫が回想するアメリカ・コンプレックスは「日本がほこるシロクロショウ」の見物で頂点に達する。「ナンバーワンペニス」のふれ込みの吉ちゃんが、ヒギンズの凝視の下ではなえたまま。俊夫は自分が不能になったように思わず力が入って、「しっかりせんかい、アメリカ人にみせたってくれ、日本の誇る偉大なる逸物、ギャフンいわしたってくれ、怯えさしたってくれ」と、ここで男が立たなければ民族の名折れ、出来ることならかわってやりたいほどの「オチンチンナショナリズム」に湧き立つ。しかし、結局は吉ちゃんの不覚。俊夫にはその理由がわかりすぎるほどわかっていた。ヒギンズにはわかるまい。俊夫は思う。「日本人かて俺と同じ年頃やないと理解できへんやろ、アメリカ人と平気で話できる奴、アメリカへ行って、まわり近所全部アメリカ人のとこでべつに気も狂わん奴、アメリカ人が視野の中に入っても身がまえんですむ奴、英語しゃべって恥かしない奴、アメリカ人けなす奴、賞める奴、そんな奴に吉ちゃんの、いや俺の中のアメリカはわかるわけない」　ヒギンズが帰っても、一生自分の中に居坐りつづけるに違いないアメリカ・コンプレックスのことを俊夫は考える。「これ

は不治の病いのめりけんアレルギーやろ」と。

敗戦の負い目は、肉体的・物理的な力のみでなく、言語に象徴される精神の優位にも屈することを強要する。アメリカ人とつき合う立場にあれば、そこから生まれる異和感は無限に拡大される。しかし、俊夫＝野坂の世代にあっては、「毛唐」と「英語」に対する抜きがたいコンプレックスは忠君愛国の戦時教育に発している。

俺達が、英語できんのも当り前や、中学入って三年目で、綴りの書けるのはＢＬＡＣＫとＬＯＶＥくらい、なんや英語らしい英語と覚えとったんがアンブレラ、人称代名詞のアイマイミイも区別がつかん、昭和十八年に入学して、たしかに一学期はローマ字の読み方をまず教わり、家へ帰ってバターの容器にホッカイドーコーノーコーシャとあるのを読んだのが横文字解いた最初、ディスイズアペンに毛も生えぬうち、英語の授業すべて教練と入れ替り、雨の日だけはそれでも英語教師が教室に来たが、「なんせアメリカの大学では、週末になるとダンスパーティなんかやってあそんでばかりおる、そこへいくと日本の大学生は」と学徒出陣を讃美し、「お前ら、イエスかノウだけ知っとったらええねん、シンガポール攻略に際し、山下将軍は敵将パーシバルに」ここでドンと机たたき「イエスかノウかな、この気魄や」顔面神経痛の、頬ひきつらせ眼玉むいていう。試験はあったけど、その和文英訳の問題が「彼女の家」これシーイズハウスと書いても、点がもらえた。

語られているのは、英語教師の一見不誠実な姿である。しかし、学ぶべき姿勢を欠き、教える名分を失った社会では、授業とは教師が生徒に加えるイヨネスコ的な暴力行為であることを看破できない平凡な教師にとって、それがむしろ誠実なのであろう。

ろくすっぽ教わらないでも、「書く英語」すなわち「音なしの英語」は、ここでも郷愁を込めて語られている。

しかし、「カムカムエブリボディ」に代表される「おしゃべり英語」へのコンプレックスは、野坂昭如の独占でも独創でもない。小島信夫が「アメリカン・スクール」(『文学界』昭29・9)で、「しゃべる英語」と「書く英語」の対立を、二つのタイプの英語教師に代表させて、アメリカ軍の占領下にあった日本人のコンプレックスを描き、昭和30年春、第32回芥川賞を獲得している。

戦後三年、アメリカン・スクール見学に集った三十人ばかりの英語の先生の話である。英語を担当しているというだけで通訳にかり出されたものの、会話など一度もしたことはなく、「満座の中で相手の分らぬ英語を聞きとったり、自分が話すことを思うと、足がすくんでしまう」という伊佐。その対極に「われわれは英語の教育に熱心です。われわれは新しい教授法を実行しているのです」と、ジープのアメリカ兵の誰かれを捕まえては言ってのけ、チャンスをつかんでアメリカへ留学したいと願う野心家の山田がいる。この両極の間に「盛装のつもりで、ハイヒールを穿き仕立てたばかりの格子縞のスーツを着こみ帽子をつけているのが、かえって卑しいあわれなかんじをあたえた」女教員ミチ子を配して、彼女がどちらの極に親和力を感じるかという興味を中心に筋が展開していく。ミチ子は英語ができる。感心したアメリカ兵がチーズの罐を与えると、その一つが伊佐のポケットにころがり込む。ベントウの箸を借りようという魂胆である。箸に代表される日本の現実と、ハイヒールに象徴されるアメリカへの夢のコントラストが見せるこちら側の「貧しさ、惨めさ」を描くことが作者の意図であったというが、ミチ子が山田を拒否して伊佐に親和感を抱くように筋が展開するのは、英語を話すことに作者が強い羞恥とワダカマリを感じているからでもある。作品集の「あとがき」によれば、作者自身のアメリカン・スクール見学のときには事件らしい事件は「一つも起らなかった」のであり、山田も架空の人物であるが、「今までなら「僕」として扱う男を、群像の中の一人物としておしこめてみた」とあることからも、伊佐が作者の心情を代

弁していることは明らかである。いったい伊佐＝小島がアメリカン・スクールに見たものは何であったのか。

ジープが去ると彼は運動場の棚の方へハダシのまま駈けて行き、そこで一息ついてからそっと靴をはき、うずくまった。そこからアメリカン・スクールの生徒たちが遊んでいるのが見えた。小学校、中学校の男女の生徒が、色とりどりの服装で、セーター一枚か、うすいシャツの上にジャンパーだけで動いている。伊佐はそこを離れて建物のかげから、なおものぞいていた。そこにおれば安全なのだ。彼は心の疲れでくらくらしそうになって眼をつむったのだが、だんだん涙が出てくるのをかんじた。なぜ眼をつぶっていると涙が出てきたのか彼には分らなかったが、それは何か悲しいまでの快さが彼の涙をさそったことは確かであった。彼はなおも眼を閉じたまま坐りこんでしまったが、その快さは、小川の囁きのような清潔な美しい言葉の流れであることがわかってきた。

それは彼がよくその意味を聞きとることが出来ないためでもあるが、何かこの世のものとも思われなかった。目をあけると、十二、三になる数人の女生徒が、十五、六米はなれたところで、立ち話をしているのだった。

彼は自分たちはここへ来る資格のないあわれな民族のように思われた。

彼はこのような美しい声の流れである話というものを、なぜおそれ、忌みきらってきたのかと思った。しかしこう思うとたんに、彼の中でささやくものがあった。

（日本人が外人みたいに英語を話すなんて、バカな。外人みたいに話せば外人になってしまう。そんな恥しいことが……）

彼は山田が会話をする時の身ぶりを思い出していたのだ。

（完全な外人の調子で話すのは恥だ。不完全な調子で話すのも恥だ）

自分が不完全な調子で話しをさせられる立場になったら……

彼はグード・モーニング、エブリボディと生徒に向って思いきって二、三回は授業の初めに云ったことはあった。血がすーとのぼってその時ほんとに彼は谷底へおちて行くような気がしたのだ。

（おれが別のにんげんになってしまう。おれはそれだけはいやだ！）

小島信夫が戦後三年目の所で捉えたこの感覚は、今も原則として変らない。アメリカ・コンプレックスを裏返しに展開した作品に喜悦して賞を与えたという事実ほど問題の根の深さを示すものもないが、日本の英語教師の心を拘束し、英語教師としての基本的な職業能力をも不能にしている呪縛は、屈辱の八月十五日が歴史から抹殺できぬ限り解けぬように思われる。例えば「私は英語教師だが、英語を教える能力はない」という小田実の開き直りはその典型である。彼は「英語、そして、ことばについて」（『世界』昭48・11）の中で、「アメリカン・スクール」を「英語のできない英語教師がアメリカン・スクールという英語の本場に連れて行かれるという恐怖と当惑にみちた小説」と評し、「かっては「進駐軍」という満天下の英語教師諸君にとってはまことにぐあいのわるい存在があった。あんな軍隊の英語はほんとうの英語じゃないですよ。アメリカ英語で、それも教育のない連中が話す英語ですよなどといきまいてみたところで、世間は無智モーマイにも、あれこそは英語の本場であると思い込んでいる。世間どころか、自分だって、そんなふうにいきまきながら、心の奥底ではそう思っている」と、コンプレックスの根深さを指摘する。しかし、小田実にも「あちこち穴ボコだらけの精巧な英語電子計算機を生み出すことに精を出して来た」日本の英語教育のどうしようもなさが判ったのは、アメリカに留学した時であっ

たというから面白い。

小田実のアメリカ留学の目標は「大学」ではなく「社会」、彼の用語を使えば「人びと留学」で、その紀行がベストセラーになった『何でも見てやろう』(昭36)である。フルブライト留学生として小田がアメリカに見たものも「貧困」の逆投影であった。

アメリカの社会を見るとき、ひとは三段階を通過すると思う。第一段階、無邪気なおどろき。金持だなあ、すばらしいなあ、というやつ。第二段階。なんだ、こんなものは日本にだってある、イバルナヨという式のイバリ反省期。それから第三段階に入ると、この社会は眼に見えないところに途方もなく金をかけた、底知れないほど豊かな社会であることが判ってくる。

しかし、中近東や印度を見て帰った小田実の貧困観からすれば「日本は貧乏国です」とは言えず、「豊かすぎるアメリカと、そうでない日本との差異——それが問題なのだ」という捉え方になる。

小田がアメリカで見たいと憧れていたものは「ニューヨークの摩天楼とミシシッピ河とテキサスの原野」の三つで、理由は「そのばかでかいもののなかに潜むわけのわからないエネルギーの塊のようなものが、私を故郷にひきつけるようにグイグイとひきつける」からであったという。小田がアメリカの中に期待した「故郷」は「原始人・野蛮人」の世界であるが、このような理由づけに潜む嘘をいち早くかぎ付けたのは安岡章太郎である。日本のベストセラーを回顧した『朝日ジャーナル』のシリーズの一つ(昭42・2・12)に、小田の紀行を取りあげた安岡は「こんなことは誰でもがいうキマリ文句みたいなもの」と評し、本当の理由は「アメリカが現在のわれわれの支配者であり、また当面の敵対者だからである」と喝破して、「何でも見てやろう」精神も「一種のアメ

リカニズムであり、八幡船的フロンティア・スピリットであろう」と、小田実自身の中にあるコンプレックスを指摘している。

しかし、安岡章太郎は小田実のアメリカ論を否定しているわけではない。現在の日本人にとって「アメリカを率直に語ることの、いかに難かしいか」を認めた上で、そのワダカマリを棄てさせるための本であると評価するばかりか、まとめて読んだ何冊かの旅行記のなかでも「非常に身近で、読みながら膝をつき合わせているような印象があった」ともいう。安岡は小田と前後してロックフェラー財団の招きでアメリカに留学したが、小田との根本的な違いは「何でも見てやろうというよりは、自分が何でもいろいろのものから見られているという意識に絶えずつきまとわれていたこと」である。その紀行『アメリカ感情旅行』(昭37)も『何でも見てやろう』にちなんで『何でも見られてやろう』にしようと考えたという。

安岡章太郎にとってアメリカが理解しにくい原因は、「同化されてしまうか、離れて外側に立つかどちらかで、その中間にいることが許されない」ことにある。アメリカ滞在中の安岡には自分が「日本そのもの」であり、自分をとりまくあらゆるものは非「日本」であるという感覚がいつも働いている。彼はこれを「よそ者」的感覚と呼ぶ。黒人を見るたびに「ある安らぎ」を感じるのも「よそ者」なればこそであるが、それが黒人への優越心でもあり、そのまま白人への劣等心につながることも同時に意識している。アメリカの複雑な人種問題は「よそ者」には理解しにくいが、小田実のほうはこれを次のような応用問題として捉えていた。

今、日本人と(同じアメリカ人である)白人と黒人が三人いるとする。その三人が、べつに深刻なケンカをするわけでもないが、何かの拍子に二派に分かれるとする。これにはおよそふた通りの組み合わせが考えられ

る。先ず同じアメリカ人であるということで、日本人対白人＝黒人。次いで、日本人＝白人対黒人。後者の日本人＝白人の結びつきの根底には、「アイツはクロンボだから」というのがどことなくあり、そしてこの後者になり得る可能性のほうが、政治的問題での論争を除けば、前者よりもはるかに大きいだろう。そしてこの場合、たぶん皆無なのは、日本人＝黒人対白人の組み合わせではないか。白人と黒人の結びつきには「同じアメリカ人だ」というのが、また日本人と白人のそれには、「アイツはクロンボだから」というのがあるとすれば、日本人と黒人のあいだにも「同じ有色人種だ、人種差別に対して闘うべきだ」というのがあってもよさそうなのに、実はそういう意識は皆無といっていいほどない。つまりアメリカでは（南ア連邦では、日本人はもっと戦闘的に自分の「有色人種」の血にめざめることであろう）、日本人はなんとなく「白人」になってしまっている。

これは正解ではない。小田も日本人の感覚を「なんとなく」と表現し、日本人が「二つの陣営の対立の外側」にいることを指摘する。日本人の視点は「よき者」の眼である。留学先を南部（テネシー州ナッシュヴィル）に選んだ安岡の場合、人種問題はさらに具体的な形で現れる。

安岡はここに来て初めて「黒人問題はすなわち白人問題である」こと、「アメリカ南部の黒人対白人の対立はつまり南部人対北部人の対立なのだ」ということを了解する。南北戦争と奴隷解放との関係は、大東亜戦争と東南アジア諸民族の独立との関係に似ているという発見である。

わが軍がどの程度本気で「大東亜」諸民族の解放をめざして戦ったかは疑問だが、結果として戦後それらの諸民族は実際に独立してしまった。同様に南北戦争後、南部の黒人たちは奴隷の身分から脱け出すことができ

たが、これは北部の「理想」が南部の「不正」に打ち勝ったためというより、戦争が人的資源を必要とした結果、南北両軍とも黒人を奴隷の地位にとどめておけなくなったからなのだ——。事情がどうあろうと、ともかく黒人たちは解放された。

南北戦争後に北軍が南部でとった占領政策と宣撫工作が、マッカーサーの対日政策と「偶然」にも一致すると驚きもするのであるが、安岡章太郎の到達するアメリカ観は、「非常に金持」の国だとは思われず、アメリカ人も「われわれと非常によく似た人たちだ」ということになる。

「よそ者」意識につきまとわれていた安岡章太郎と対照的なのは江藤淳である。安岡と同じようにロックフェラーの招きでプリンストンに留学した江藤は、アメリカであろうが東京であろうが、自分の「生活」は変えようがないと主張する。「外の世界」を経験して来た日本人に伝統的に課せられている義務と感じて『アメリカと私』と題する紀行を連載（『朝日ジャーナル』昭39）した江藤は、その冒頭で二人の先達を批判する。

「何でも見てやろう」というおりた観察者の姿勢に無理があるように、「いつでも眺められている」という自意識に縛られた演技者のポーズも不自由なものである。それらはふたつながら平常心を欠いている。「生活」というものが、ひっきょう見たり見られたりという戦いの連続である以上——しかもだれもとくに意識してそうしているのではない以上、見る一方、あるいは見られる一方という外国生活が、健康なものだという理由はないのである。

江藤の観察によれば、アメリカの社会を支えているのは適者生存の論理である。世界でソーシャル・ダーウィ

ニズムが暗黙の日常倫理になっている唯一の国に住むからには、まず内なるコンプレックスに対決することを迫られる。

実際、他人を自己の投影としてではなく、純粋の他人として理解することはむつかしい。われわれが、外国人の日本理解の浅薄さを嘆じながら、自分たちの外国理解の浅薄さに気づいていないのは不思議なことである。早い話が、私は合衆国の歴史をきわめてばくぜんとしか知らなかったし、知る機会もなかった。占領時代から今日まで、おびただしい数の米国人が日本の土を踏み、圧倒的な米国文明の影響が浸透しつつあるにもかかわらず、われわれは、この米国というかっての敵であり、今日の同盟国、あるいは経済的な競争相手を、決してひとりの他人として冷静に理解しようとはしていない。それが、もちろん敗けた日本人にとって容易なことではなかったとしても。

私自身にしたところで、ふりかえってみれば今までほとんど無意識のうちに米国を避けていたような気がする。たとえば、私は、求めればその機会があったのに、出発直前必要に迫られてそうするまでは、米国人と交際しようとは思わなかった。それは、多分、占領時代に決定された勝者と敗者の関係、あるいは楽天的な教師と懐疑的な生徒との関係が、個人のつきあいのなかにまぎれこむのがいやだったからである。

したがって、私はあまりアメリカ映画を見ず、アメリカ音楽を聴かず、英語放送を聞かなかった。私の語学的知識は、すべて日本人の教師から得たものである。しかし、これらは要するに私の心理的自己防衛にすぎなかった。私は、自分のどこかしらによどんでいる米国に対する恐怖、あるいは屈辱感で、米国人や米国文化の所産をいろどり、それに自分で勝手に反発していただけであった。が、実は、米国人も、合衆国も、私の個人

的感情のいかんにかかわらず、そこに存在するのである。私は、まずこの事実を受入れなければならなかった。

アメリカの社会で「適者」であることを証明するための第一歩は、英語を話すことである。「適者」であることを選んだ人間が、英語をつかうのは当然である。日本で会ったときには日本語で話したジャンセン教授を訪れて、自然に英語で話すのも、江藤の決意の現れである。

教授の日本語が私の英語より数等立派なものであることはわかり切っている。が、ここは米国であり、そうである以上は英語をつかわなければならない、と私は感じていた。それは自分の英語が上手か下手かという問題ではない。現に自分が英語国にいるという現実を認めるか認めないかの問題である。その現実を認めたくないなら、最初から米国へなど来なければよい、と私はひそかに思った。それは私が何かを主張するための第一歩であり、だれかの意志に支配されぬための第一歩でもある。

このように「日常心」を失わないでアメリカを観ようとした江藤淳を対極に意識しているのが山崎正和であろう。「劇作家」としてイエール大学に留学した山崎は『このアメリカ』(昭42)で、「純粋なアメリカ人」とは何か、アメリカ人のエトスとは何かを、身近かに付き合った誰かれの特徴の中に探っている。

劇作家らしい人間観察から第一に浮び出てくるのは、アメリカ人たちには「心情的な意味で故郷というものがない」という感慨である。それも子供の頃から、あまりにもあちこち移動しているうちに、どこが故郷だかわからなくなり、「あまりの自由さゆえに故郷を求める感覚を失った」のだと、地理的な〈故郷喪失〉が心理的な〈故郷喪失〉と重なりあうことを指摘する。イタリア系移民の友人と付きあっては、花に対する鋭敏な感覚に驚嘆し

ながらも、その中にアメリカ人の〈故郷喪失〉を見るのである。

アメリカ・インディアンでないかぎり――いや、かれら自身を含めて――アメリカ人はすべて他国からの移民であり、故郷を失ったひとびとだということはアメリカを見ないさきからわかりきった事実であろう。けれどもその失われた故郷の存在が、ていどの差こそあれひとりひとりのアメリカ人の心のなかに、まさに失われた存在として保存されているという現実は、まのあたりにみると一種の切実を感慨をひき起すということもまた事実なのである。

だからといって、意識的に故郷を捨てて「アメリカナイズ」することを理想にするときの危険も、ギリシア系一世の演劇学の先生の苦悩の中に感じ、次のように分析している。

どの国民も自分のうまれた国の人間以外のものには絶対になれないのが普通であるのに、だれでもがアメリカ人にだけは、なろうと思えば原理的になれるということは、考えれば考えるほど恐ろしいことであるように思うのである。たとえば私たちはドイツ人には絶対になれないのであるが、そのことは私たちがドイツ人とはちがってじつは何者であるかということを、いってみれば自動的に証明してくれもするのである。（中略）

ところがアメリカという国は、ほとんど感覚のうえでも、私たちを「異邦人」のままには抛っておいてくれないところがあるようだ。私についていえばアメリカはたいへん居心地がよく、もし条件が許せば、そのまま永住してしまうのになんの抵抗も感じないのではないかという恐怖に襲われたのである。居心地がよいというのは、なにも人間が親切だとか、物質的に豊かだとかいうことではない。自分は外国にいるくせに、他人の家

に間借りをしているという当然あるはずの肩身の狭さがほとんどなかったということなのである。（中略）

けれども、アメリカの恐ろしさというものもまた、まさにその点にこそあるのであって、だれでもがアメリカ人になれるということは、裏返していうならば、自分がもと何者であったかを、自分で積極的に証明してみせなければならないということを意味している。

アメリカ人になる誘惑と危険をこのように捉えた山崎にとっては、ニューヨークで自作上演を果して「なりかけのアメリカ人」の生活を模倣することに「成功」したからには、「国へ帰る」ことは確実に意識的な行為になった。このとき山崎の意識は二十年まえ、十二歳で満州から引揚げたときの記憶と重なるのである。

ソヴィエト軍のきびしい占領を経験した満洲の日本人は、アメリカの占領が、同胞によって「解放」としてうけとられているとは、夢にも思わなかった。「皇国日本」のイメージは完膚なきまでに毀されていたが、そのかわりに「民主日本」の理想が信じられているとはだれも知らなかったのである。それにもかかわらず、子供心に自分をひきつけていた祖国とは、あれはなにだったのだろうと思わないではいられない。「日本」のイメージからいっさいの理想めいたものがはぎとられてしまったときに、それでもなお私をつかんではなさなかった「日本」がたしかにあったのである。

しかし、満洲の日本人とは何か。移民である。朝鮮の日本人とは何か。移民である。中国の日本人とは何か。侵略者である。しかも、アメリカ人が移民であることは、山崎自らが指摘する通りである。満洲移民であった山崎正和が移民以外の何ものでもない「純粋アメリカ人」の落し穴を知っていたのは当然であろう。さらに、アメ

リカを使配するＷＡＳＰがイギリス系の移民であり、当のイギリス人はブリテン島の原住民ではなかったという文化人類学上の事実をここで指摘する必要があるのだろうか。

このような視点に立てば、野坂昭如が語る「めりけんアレルギー」の本質は明瞭である。移民に対する原住民の感覚なのである。政治的には支配者に対して被支配者がいだく感情であることは言うまでもない。このようなアレルギーに対処するには、己も移民に徹するか、逆にはっきり拮抗するかであろう。その決断がつかぬ限り、コンプレックスからの解放はない。